慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バシレウスの末裔 : アレクサンドロス大王と秦の始皇帝
Sub Title	Descendants of basileus basileon : Alexander the great and the first Qin emperor
Author	森, 雅子(Mori, Masako)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.2/3 (2022. 5) ,p.97 (227)- 118 (248)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220500-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

――アレクサンドロス大王と秦の始皇帝バシレウスの末裔

森 雅 子

王位に就いた。以後、彼は父の悲願であったペルシア帝である。当時、マケドニアはギリシアの諸都市国家からである。当時、マケドニアはギリシアの諸都市国家からは後進地帯、野蛮な外国人(バルバロイ)の国として蔑は後進地帯、野蛮な外国人(バルバロイ)の国として蔑は後進地帯、野蛮な外国人(バルバロイ)の国として蔑ロスの王女オリュンピアスを母として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者アの王国の正当な王位継承者として、当時最高の哲学者であった。

に、彼の即位後の生涯を略述する。 最も相応しい人物としての足跡を歴史上に残した。以下 樹立し、まさしくバシレウス(諸王の王)という称号に の短い生涯の間に遠征と戦闘を繰り広げて広大な帝国を アジアの分岐線であるヘレスポントスの海峡を渡り、そ アジアの分岐線であるペレスポントスの海峡を渡り、そ

たドニアの北辺を脅かしていた北方蛮族を制圧するためすなわちマケドニアの覇権を承認させた。ついで彼はマロ集し、彼らに二年前にフィリッポスの軍事面における最高責やパルメニオン(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)ス(フィリッポスの外交面における片腕であった高官)

バシレウスの末裔

九七 (二三七

除いてペルシアの征服という大事業に着手する。で蜂起したテーベを取って返して滅ぼし、後顧の憂いをに遠征したが、この間に彼が戦闘中に死んだという誤報

前三三四年、後事をアンティパトロスに委ねた彼はペ 前三三四年、後事をアンティパトロスに委ねた彼はペーシアの実配下にあったの西海岸に進軍し、それまでペルシアとの第一戦「グラを発ち、アジアに上陸してペルシア王ダリウス三世がラを発ち、アジアに上陸してペルシア王ダリウス三世が

とりわ 制圧しつつ南下し、 東岸に連なるシドン、 的大軍を誇る相手を打ち負かした。ついで彼は地中 着手、またエジプトの古来の神々への表敬訪問を行い、 間に後に彼の霊廟となるアレクサンドリアの建設工事に して迎え入れられたこの地に半年間滞在した彼は、その ルシアの支配下にあったエジプトに到着した。解放者と イオス三世と直接対決したが、この戦いにおいても圧倒 の第二戦「イッソスの会戦」に臨み、ここで初めてダレ 前三三三年、小アジア内部を制圧した彼はペルシアと け襲い掛かる水不足や砂嵐といった困難をものと 重傷を負いつつも前三三二年当時ペ テュロス、ガザなどの海港都市を 海 0

もせず砂漠の中にある神アンモンの神殿に参拝したこと

は名高い。

の間に生まれ、まず大王暗殺の陰謀事件に絡んで側近の を採用し始めたことに対する批判がマケドニア将校たち この前三三〇年秋以降、 ジプト・ペルシアを統べるバシレウスとなった。 この段階でアレクサンドロスが「大王」―ギリシア・エ ネス朝ペルシア で、その死により建国以来繁栄を誇った世界帝国アケメ ア太守ベッソスら部下に裏切られ暗殺されてしまったの 地としてパルメニオンに委ねた後、逃亡を続けるダレイ リスを陥落させ、夏の離宮であったエクバタナを前線基 た。大勝利を収めた彼は、その勢いにのってペルシア帝 その僅か五分の一の軍勢でこれを打ち破り、 えて広大な平原に布陣していたが、アレクサンドロスは て北上し、 オスの追撃行に出発した。 国の象徴ともいうべき古都バビロン、スーサ、ペルセポ イオスはペルシア全土に総動員をかけ、万全の準備を整 の村に辿り着く。この「ガウガメラの会戦」では、 ルシア王との再度の対決のためにメソポタミアを目指 前三三一年にエジプトを出発した彼とその軍団 ユーフラテス河を渡り、ティグリス河の近郊 (前五五〇~前三三〇年) は完全に滅び 彼がアケメネス王家の宮廷儀礼 しかし翌年、後者はバクトリ 敗走せしめ なお、 は、 ダレ **√**°

板であったマケドニア軍の中枢部の軋轢、 身の槍で刺殺され、 れまでペルシア帝国を倒すという目標達成のために一枚 の大王暗殺陰謀事件に連座した廉で処刑されるなど、 の命を間一髪で救った幼馴染の武将クレイトスが大王自 ルシア人の将軍と一 続けて前三二八年秋には「グラニコスの会戦」でペ ロタスが処刑され、その父パルメニオンも謀殺され 遠征に従軍していたカリステネスもまた近習たち 前三二七年にはアリストテレスの親 騎打ちをしていたアレクサンドロ もしくは亀裂 ح ス

0

ンド ロクサネと結婚したのはゲリラ戦に手を焼いたアレクサ グディアナの住民が一斉蜂起、その鎮圧に二年を要して メネス(ベッソスの側近)に扇動されたバクトリア・ソ 前三二九年、彼はイラン高原から中央アジアへと侵攻 裏切り者のベッソスを捕らえて処刑したが、スピタ 前三二七年、 スの象徴的な和解の表現であったと推定されてい 彼がこの地でバクトリアの豪族の娘

て瀕死の重傷を負っている。

が顕在化していった。

ドのポロス王と対峙する。 渡った彼と軍団はその支流 三二七年六月、 東征は再開され、 後者は歩兵や騎兵隊・戦車隊 の一つヒュダスペス河でイン 翌年インダス河を

> ンドロ めされつつ帰国の途につく。 抵抗が強く、彼はその従軍拒否に屈し、挫折感に打ちの 打ちのめされていたアレクサンドロスもようやく立ち直 られ、同盟者となったポロスはインドを横断してガンジ をとり、 ら密かに渡河した本隊がこれを打ち破るという奇襲作 インダス川を下る際にマッロイ族と戦い、 れ果て、これ以上の東方への進軍を拒否する部下たちの ス河までの道案内を申し出、 の会戦」においても勝利を収めた。ついで領土権を認め 他、 東征の続行を決意する。 スは嵐の夜敵軍の正面に別働隊を配置 象軍を率い、ギリシア軍を圧倒したが、 彼にとって最後の大会戦となる「ヒュダスペス なお、 しかしこれまでの遠 愛馬ブーケファラスの死に 彼はその撤退の途上 敵の矢を受け アレクサ 上流 征に疲

り、

洋沿岸の探検航海を命じられたネアルコス(学友の一人) らペルシアの南岸部に至る海岸沿いを、 陸路を西に進み、第二軍は彼自身が率いてパキスタンか 継いでマケドニア全軍の次席の地位にあった) 河が海に達した地点で一行を三分し、第一 前 (学友の一人、パルメニオンが謀殺された後その跡を 三二五年、 傷の癒えたアレクサンドロスはインダス 第三軍はインド 軍はクラテロ が率い

ス

「奇跡」以外のなにものでもなかった。 「奇跡」以外のなにものでもなかった。 「一方」、ともあれ全軍がペルシアで合流できたのはに、とされ、ともあれ全軍がペルシアで合流できたのはに、の横断で甚大な被害を蒙り、彼らによる水や食料の着いたのは第一軍のみで、第二軍は「地獄のマクラン砂道」の横断で甚大な被害を蒙り、彼らによる水や食料の着いたのは第一軍のみで、第二軍は「地獄のマクラン砂道」の横断で甚大な被害を蒙り、彼らによる水や食料の積なくされ、ともあれ全軍がペルシアで合流できたのは、なり、が率いて海路を進んだ。全軍はペルシア湾の入り口にあた。

ドロスは過度の飲酒の末に熱病に罹り、前三二三年三十えて、多忙な公務による疲労が極限に達したアレクサンえて、多忙な公務による疲労が極限に達したアレクサンスで、多忙な公務による疲労が極限に達したアレクサン共にしてきたヘファイスティオンにもダレイオスの次女共にしてきたヘファイスティオンにもダレイオスの次女共にしてきたヘファイスティオンはエクバタナで病死し、この無二の親友の死に加ィオンはエクバタナで病死し、この無二の親友の死に加ィオンは上の飲酒の末に熱病に罹り、前三二三年三十次の表による強力が極限にであり、前回にはいいのであり、

前三二四年、彼はスーサで部下とペルシアの女性たち

バビロン)で生涯を終えたのであるが、その最期の言かくして彼は故国マケドニアに帰ることなく異国の地

一歳で死んだ。

消していく。 頭してきたローマ帝国に征服、吸収されて歴史から姿を 突入し、最終的にプトレマイオス朝エジプト、セレウコ 後継者たちは大王の遺産を巡って約半世紀に及ぶ戦争に 跡形もなく消滅した。その後、ディアドコイと呼ばれた 母妹クレオパトラも次々と暗殺され、彼の一族の血脈 リュペティス)、さらにはアレクサンドロスの唯 母オリュンピアス、ロクサネやスタテイラ(とその妹ド クサンドロス四世はこの争いの中で殺害された。 スの異母兄アリダイオス(フィリッポス三世)、愛妾バ 彼が征服した国々や地方は忽ち分裂し、アレクサンドロ 配下の有力な将軍たちは壮絶な後継者争いを繰り広げ、 後継者を明確に指名するものではなかった。そのため、 葉はクラティストイ、すなわち「最強のものに」であり、 ス朝シリアが生き残るが、やがて彼らの王国は西方に台 ルシネが生んだヘラクレス、正妻ロクサネの生んだアレ また、

て人々を魅了し続け、忘れられることはなかった。ローした「ヘレニズム世界」を生み出した不世出の英雄とし敗の将軍として、またギリシア文化とアジア文化を融合限りの全世界にその足跡を残した偉大な軍略家・常勝不同方、アレクサンドロスの名前は、当時知られていた一方、アレクサンドロスの名前は、当時知られていた

代表的五篇の大王伝はいずれも死後数百年を経て完成し多くの著述家がその生涯を書き残した。但し、現存する帝、政治家、貴族たちが彼を賛美し、崇敬の対象とし、マ帝国においてもポンペイウスをはじめ多くの将軍、皇

が施されるのを免れることが出来なかった。 (5) よって彩られ、様々な伝説が付け加えられ、

脚色・増幅

たものであり、その結果彼の生涯は過剰なエピソードに

を知ったという。さらに、プルタルコスはアレクサンドを知ったという。さらに、プルタルコスはアレクサンドとな炎が燃え広がった夢を見たとか、父フィリッポスがきな炎が燃え広がった夢を見たとか、父フィリッポスがきな炎が燃え広がった夢を見たとか、父フィリッポスがを満婚後しばらくしてから自分が妻の腹に獅子の像の彫刻結婚後しばらくしてから自分が妻の腹に獅子の像の彫刻たたわっていると考え、彼女との共寝を避けたという言い伝と横たわっているのを見て、彼女が人間以上のものと交と横たわっているのを見て、彼女が人間以上のものと交と横たわっているのを見て、彼女が人間以上のものと交と横たわっているのを見て、彼女が人間以上のものと交に、プルタルコスの『英雄伝』では、アー例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アー例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげれば、プルタルコスの『英雄伝』では、アーの例をあげた。

する。 するのであるが、これらの遠征の途上においても幾つか 取って返してペルシア帝国を滅ぼし、インドにまで進軍 ア本土の諸都市、 リッポスが立てたアジア遠征の計画を引き継ぎ、ギリシ と共に届けられたので、その日(現在のユリウス暦では リッポスのもとに戦場の勝利やその他の喜ばしい知らせ ことになる別の災害(アレクサンドロスによる征 留守であったためとか、この災害は後にペルシアを襲う し、それはお産の女神でもあったアルテミスがこの英雄 たエフェソスのアルテミス神殿が炎上崩壊したことを記 よって書き残されている。再び、プルタルコスから引用 の奇跡、幾つかの華々しいエピソードが伝記作家たちに ンドロスは、上述したように二十歳で王位に就くやフィ 七月二〇日)に生まれた子が将来必ずや「不敗の人」に 前兆であったという説を伝え、彼の誕生そのものもフィ の出産に立ち会うためにマケドニアに駆けつけていて、 ロスが生まれたその日に、ペルシア帝国の支配下にあっ なるであろうと予告するものであったと付記している。 かくして周囲の期待を一身に担って誕生したアレクサ 小アジア、エジプト・リビアを征服

アレクサンドロスは「グラニコスの会戦」でペルシア

バシレウスの末裔

時は「海がアレクサンドロスに道を譲り」……彼らはそ鳴り響く岩をたまに現出するだけであった」のに、このら荒波が打ち寄せて、山の切り立った崖の下の方に狭いいったが、その途上のパンフュリアでは「いつもは海か軍を破った後、小アジアの諸都市を制圧しつつ南下して

起こっている。またエジプトに入国した彼は、リビア砂

の難所を無事に通り抜けることが出来たという、奇跡が

が国においても神武天皇の建国神話に見出される奇跡は、が国においても神武天皇の建国神話に見出される奇跡は、か不足は天からの大雨やにわか雨によって解消され、か水不足は天からの大雨やにわか雨によって解消され、かれて道案内をし、後つかの奇跡が起こり、砂漠におけるおも驚くべきことは彼らの一行が道に迷った時に鴉が現のまっただ中を踏破してシーワ・オアシスにある神ア漠のまっただ中を踏破してシーワ・オアシスにある神ア

前三世紀にすでに出来上がり、

ついで様々な伝承や虚

したとする諸説があり、今日では物語のおおまかな筋

〇年頃(もしくは三世紀、

二世紀から四世紀初頭に成立

れるが、彼が僅か三十二歳の若さで死ぬと、その劇的な時に書かれた伝記中にもすでに記録されていたと推定さなお、このような大王の神格化・伝説化は、その生存

方に誕生していたことを論及したい。

たちが登場する以前に、もう一人のバシレウスが遥か東

あり、

「父なる神からのわが子アレクサンドロスへの挨

「神から与えられた救い」で

アレクサンドロスの場合は

拶」であったと解釈された。 (8)

佐分散していった。その代表とも言うべきものは前二○物や神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界かなくとも、それに近い小説として、荒唐無稽な動・植びかなくとも、それに近い小説として、荒唐無稽な動・植がなくとも、それに近い小説として、荒唐無稽な動・植物や神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界物や神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界がや神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界がや神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界がかなくとも、それに近い小説として、荒唐無稽な動・植めや神話上の人々が登場する空想の世界を描出して世界がある。

であるが、本稿においてはそれらの著述及びその主人公の詩人フィルドゥスィーの『王書』(シャー・ナーメ)の詩人フィルドゥスィーの『王書』(シャー・ナーメ)の詩人フィルドゥスィーの『王書』(シャー・ナーメ)の詩人フィルドゥスィーの『王書』(シャー・ナーメ)の詩んフィルドゥスィーの『王書』(シャー・ナーメ)の詩館などが累積し、三世紀に正典と呼ばれるようなテの書簡などが累積し、三世紀に正典と呼ばれるようなテ

それはアレクサンドロスより約百年遅れて、

分裂と闘

生涯を略述する。 (宮) あるのもまた疑いようのない事実である。以下に後者の を同一線上で論じることは不可能である。とはいえ、 という帝国の皇帝であり、その「創業者」であり、両者 いるのに対して、ここでとりあげる始皇帝はあくまで秦 涯―その歴史上の足跡に添った形でロマンスを展開して を滅ぼして天下を統一し、その地に最初の帝国を創建し ばれた国々(韓・魏・趙・斉・秦・楚・燕)の他の六国 レクサンドロスと始皇帝との類似には目を見張るものが (二本の角を持つ者)、セカンダルとその名前を変えなが スに登場する主人公がイスカンダル、ズルカルナイン た秦の始皇帝である。但し、アレクサンドロス・ロマン 争を繰り返していた中国の戦国時代に生まれ、 そしてアレクサンドロス・ロマンスに登場するア 明らかにマケドニアのアレクサンドロス大王の生 七雄と呼 史

よう。

王となる)、母は公子がまだ趙の人質であった頃、 生まれた。父は秦の公子嬴異人 五九年、政すなわち後の始皇帝は趙の都の邯 (後に子楚と改名、 大商 荘襄 鄲に

姫

バシレウスの末裔

を援助した呂不韋の賭け・野望は見事に成就したと言え 知れない。手元においておこう)と宣言し、不遇の公子 し」(珍しい品物だから、あとで大きな利益を生むかも 子に推挙し、遂には秦王となる道を開いてくれた恩返し 王)の正夫人華陽夫人やその姉に莫大な贈り物をして養 金品を惜しみなく与え、安国君(昭王の太子、後の孝文 た、荘襄王は二十年にも及ぶ人質としての不遇の時代に が、やがて秦に帰国した父が王位を継ぐと、九歳になっ た政は母と共に迎え入れられて太子に立てられた。 に呂不韋を相国に任命した。この段階で「奇貨おくべ 人の呂不韋から譲り受けた趙姫 (呂不韋の愛妾) である

に封ぜられて文信侯と号した。一方、未亡人となった趙 荘襄王の時代と同様に重く用いられ、 るにはしばらくの時が必要であった。とりわけ呂不韋は たよりも若い王の出現であり、それ故彼が実力を発揮す が十三歳で秦王となった。これはアレクサンドロスが て「仲父」と呼ばれ、秦の政治の実権を掌握し、 ィリッポスの暗殺によって二十歳でマケドニア王となっ 前二四六年、荘襄王が即位して僅か三年で死ぬと、政 (荘襄王の夫人、政の生母、この段階で太后と呼ばれ 政の後見人となっ 十万戸 フ

彼を長信侯に封じ、宮室・車馬・衣服・苑囿・狩猟などこれを宦官と偽って後宮に引き入れ、寵愛した。しかもと呼ばれる「大陰(巨大な男根)の人」を紹介されると、た)は当初呂不韋との関係を続けていたが、彼から嫪毐

脚を図ったが、いずれも事前に発覚して失敗に終わった。留で反乱を起こし、翌年には嫪毐が謀反を企て、政の失留二三九年(在位八年)、異母弟成蟜(長安君)が屯

前二三七年(在位十年)、二十二歳になった政はこの

めにしてその恨みを晴らしたと伝えられている。

ろがなかった。彼らの間には二人の男子が生まれている。彼の欲するままに任せたので、その放縦はとどまるとこ

いたが、後に実の母を幽閉することは「不孝」であるとの失脚を図ったとされる太后は雍城の離宮に幽閉されての官を免じ、失脚させた。翌年、呂不韋は封地であるての官を免じ、失脚させた。翌年、呂不韋は封地であるての官を免じ、失脚させた。翌年、呂不韋は封地である二つの内乱事件を収束させたことによってようやく親政二つの内乱事件を収束させたことによってようやく親政

前二三二年(在位十五年)頃までに、他の諸国とは較

下を統一した。

批判されることを恐れた政によって、

咸陽の甘泉宮に戻

ることを許され、前二二八年(在位十九年)にその地で

国併合に乗り出した。

丞相にまで昇格した楚人)の戦略に基づいて本格的に六小が、登上の事活動」に着手、李斯(呂不韋の舎人であったが、後に本ようもないほどの軍事力を得ていた秦は「大規模な軍

父を冷遇し、母子にも酷い仕打ちをした人々を全て穴埋ぼした。なお、この時邯鄲に入場した政は人質であったの趙嘉が代郡に逃れて代王と称したが)、事実上趙も滅二二八年(在位十九年)趙に侵入して趙王を捕らえ(兄二二八年(在位十七年)秦の軍勢は韓を滅ぼし、前前二三〇年(在位十七年)秦の軍勢は韓を滅ぼし、前

諸制度の全国的統一を図った。中央集権化政策の実現に着手、度量衡・貨幣・車幅など中央集権化政策の実現に着手、度量衡・貨幣・車幅などと称し、ついで李斯のもとで、法家思想に基づく厳しいと称し、中国全土を統一した政はみずからを皇帝秦王として立って二十六年、ほぼ十年で敵対する六国

ど休養した。この時、斉人徐福が「海中の三神山に仙人で立石、とりわけ瑯邪山の風光を愛でてその地に三月ほ後、彼はさらに渤海に沿って東に進み、之罘山、瑯邪山徳、彼はさらに渤海に沿って東に進み、之罘山、瑯邪山帝は山東省を目指し、その地の嶧山に登って立石。つい前二一九年(在位二十八年)、第二回目の巡幸で始皇前二一九年(

男・童女数千人を随行させ、多額の費用を添えて東海の男・童女数千人を随行させ、多額の費用を添えて東海のいる。これが『史記』において始皇帝が不老不死というものに関心を示した最初の記録であるが、古来中国ではんでいる仙人が持っているという伝説、もしくは信仰がんでいる仙人が持っているという伝説、もしくは信仰があり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしばあり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしばあり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしばあり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしばあり、第一回を除くと始皇帝の度重なる巡幸がしばしばいるのに説への信奉・憧憬を反映するものであったことは明らかである。

言を入れて「仙丹」を探し求めることに熱中し、夥しいへの憧憬に突き動かされて、方士や道士といった輩の進する強い執念とそれを持っていると信じられていた仙人うになっていった。その結果、彼は不老不死の霊薬に対らか、病的なまでに迷信深く、また極端に死を恐れるよて、三回にも及ぶ)殺害の危機から辛くも免れた経験かて、三回にも及ぶ)殺害の危機から辛くも免れた経験か

金品を浪費している。

あり、 帰り、 という預言書を献上すると、始皇帝は将軍蒙恬に命じて 際、この後使者として海に浮かんだ(と称する)盧生が という一人の名前とする説もあり、詳細不明)に命じて 省の碣石山に登り、 すます異常になり、同時に国民の困窮や貧困を無視する (古の仙人。 仙丹」を求めさせるなど、彼の不老不死への願望はま 前二一五年(在位三十二年)の第四回の巡幸では河北 詳細不明)という仙人がいると聞いて燕人盧生を 鬼神のお告げとして「秦を滅ぼすものは胡なり」 無慈悲さはエスカレートする一方であった。 また韓終・侯公・石生(一説に韓終侯の公石生 一説に羨門高という一人の名前とする説も 立石。この時、 始皇帝は羨門・高誓 実

その翌年には従来の城牆を拡張、

補強して「万里の長

前二一一年

(在位三十六年)、隕石が落下し、

その石

兵三十万を率いて北方の「胡」すなわち匈奴を討たせ、

人々の負担は絶大であった。 しても五十万の兵力を送り込んでその地を支配下においたが、このような大掛かりな軍事活動の他に、彼は咸陽に前房宮を、驪山に始皇帝陵を造営するなどの建設工事に対いる重したが、このような大掛かりな軍事活動の他に、彼は咸陽に着手し、これらのために軍務や労役に駆り出された。

生」を穴埋めにしたとされる「坑儒」であ 亡したので、 汁を吸っていた侯生・盧生が懲罰をうけるのを恐れて逃 これまで始皇帝の「仙丹」に対する執着を利用して甘い 払い、思想や言論を統制するものであった。 書など(医薬・卜筮・農業に関する書物を除く)を焼き それは秦の記録でない歴史書、儒家の詩書や諸子百家の 最も極悪非道な罪状の一つとして喧伝された。 して「坑」の刑に処した。これが四百六十余人の「諸 政府に批判的な学者たちと共に社会騒乱の罪を犯したと て咸陽で大宴会が催されたが、その席で李斯がいわゆる 焚書」と共に「焚書坑儒」と呼ばれ、 焚書」の法案を献議し、始皇帝によって裁可された。 前二一三年(在位三十四年)、 激怒した始皇帝は彼らと同属の輩を捕らえ、 南征北伐の成功を祝 後世彼 ŋ 翌年には、 が犯した 前 0

う不吉な予言が繰り返された。いう声が聞こえるなど、始皇帝の死期が迫っているといった時、ある男から壁を渡され、「今年祖龍が死ぬ」と年の秋、始皇帝の使者が五岳の一つである華山の北を通う事件が起こり、彼は予定していた巡遊を中止した。同ら不吉な予言が繰り返された。

前二一○年(在位三十七年)、始皇帝は五年ぶりに巡前二一○年(在位三十七年)、始皇帝は五年ぶりに巡り着くが、山東省の平原津で病に倒れ、河北省の沙と祀り、立石。さらに彼は海に出て琅邪から之罘山の、を祀り、立石。さらに彼は海に出て琅邪から之罘山の、を祀り、立石。さらに彼は海に出て琅邪から之罘山の、を祀り、立石の、本田の、本田の、 がりに巡れている。

世皇帝を操り、 も迫って自殺させるが、 の驪山陵に埋葬された。 始皇帝の遺骸はその死を隠すために乗車に乾魚を積み込 に追いやり、末子胡亥を二世皇帝の地位に就けた。 この後、策略家の宦官趙高と丞相李斯は始皇帝の死を 異臭を誤魔化して都の咸陽に運ばれ、 その間に彼の遺言を書き直 李斯を斬腰の刑に処し、 その後彼が秦王として擁立した ついで趙高は全権を掌握して二 Į 長男の扶蘇を自殺 ついには胡亥に 陝西省臨潼県 なお、

代を迎えた。

述することによって、この書が後世の人々、 ず」、その天下統一という業績をとりあえず評 自身は直截的に「始皇帝を正面から暴君とは位置づけ 帝の本来の姿を描出しているかは疑問である。 であろうことが推定されるので、この書がどこまで始皇 に関しては彼独自のかなり自在な取捨選択をおこなった とされるが、『秦記』はすでに失われ、しかも伝説故事 る文献資料(『秦記』や石碑など)や始皇帝に関する民 るとはいえ、 間の様々な伝説故事などを参考にしてこの書を編纂した の死からほぼ百年後のことである。従って、彼は先行す に見てきたが、司馬遷がこの書を編纂したのは、 以上、始皇帝の生涯を『史記』「秦始皇本紀」 記述の端々にその暴虐さや愚行の数 とり 実際、彼 温し 始皇帝 を中心 かけ儒 ~々を記 てい

し、彼による学派への弾圧を強調することによって自ら記述を捻じ曲げ、拡大解釈して始皇帝の悪逆非道を喧伝を提供したといっても過言ではない。後者は『史記』の家的な立場の人々に始皇帝を「暴君と位置づける」資料

の立場を有利にしようとするキャンペーンを展開し、

くされたのである。 帝のイメージはマイナスに変貌・変質することを余儀な帝のイメージはマイナスに変貌・変質することを余儀なの姿を繰り返し言及したので、時代を経るにつれて始皇かも自己の不老不死を切望し、愚行を繰り返すその晩年

一方、アレクサンドロスの伝記もまた死後まもなく書

底偶然の一致とは考えなられない複数の類似点が見出さ底偶然の一致とは考えなられない複数の類似点が見出さなになったのである。しかし、この二人の生涯には到たとして、前者はプラスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、前者はプラスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、前者はプラスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、前者はプラスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受け、光の中を歩む英雄として、後者はマイナスの評価を受け、光の中を歩む英値に対していないが、そこでは対照的に、カースを関している。

はないかということを検証してみたい。あり、その末裔の一人であったということも可能なのでも指摘しつつ、後者が前者の模倣者(エピゴーネン)でれることに関して次章でとりあげ、ついでその相違点を

てからであり、以後代々の秦王によってそのレールが受 六一〜前三三八年在位)の時代に商鞅の「変法」を用い が、その「盟主」(ヘゲモン)としての地位が磐石のも 得して初めてギリシアの諸都市から同盟国と認められた あげ、その領土を拡大して「軍事的、政治的優位」を獲 う共通点を有している。前者は帰国後精強な軍隊を作り 都邯鄲に人質として預けられ、不遇の日々を過ごすとい 市国家テーベ、始皇帝の父嬴異人(後の荘襄王) かもアレクサンドロスの父フィリッポスはギリシアの都 古くから栄えた由緒ある国ではなく、むしろ周辺の地域 を継いだ秦も西方の強国として台頭したのは孝公 ることからも明らかである。また、後者が帰国後に王位 のではなかったことは彼の死後直ちに反乱が起こってい からは蛮夷の、文化果つる国として蔑視されてい I. まず二人の生まれた国(マケドニアと秦) は趙 は共に (前三

の国」であった。

「語」であった。

「国」であった。

 \prod

アレクサンドロスの父フィリッポスに関しては、

であったことは『史記』「呂不韋列伝」に暗い影を宿の上に落ちてきて炎となり、世界中に燃え広がる夢を見の上に落ちてきて炎となり、世界中に燃え広がる夢を見るのを見て共寝を避けたという類の噂があり、その結果生まれたアレクサンドロスは「神の子」であり、彼の実の息子ではないと考えられていた。同様に、始皇帝もまた名目上の父とされる荘襄王の子ではなく、呂不韋の子であったことは『史記』「呂不韋列伝」に明記されていてあったことは『史記』「呂不韋列伝」に明記されていてあったことは『史記』「呂不韋列伝」に明記されている。

権勢力が強く、夫や息子に対しても干渉過多・嫉妬深いⅢ. アレクサンドロスの母オリュンピアスは、異常に

シレウスの末裔

入れるという形をとり)都咸陽の甘泉宮に迎え入れてい 城に捕らえるにとどめ、次いで(斉人茅焦の諫言を受け れを暗殺する計画を建てた時にも協力関係にあったと思 が知られている。しかも嫪毐が秦王政の排斥を謀り、こ 精力絶倫の男性を寵愛して二人の子供までもうけたこと 荘襄王の死後も呂不韋と関係を続け、ついで嫪毐という 帝の母趙姫は淫乱な女性として名高く、上述したように の大部分を贈り続けたことで明らかである。一方、始皇は、戦場にあっても頻繁に手紙のやり取りをし、戦利品 挟み、悶着を起こしている。にもかかわらず、アレ 残して遠征に出発してからも、 という根強い噂があり、アレクサンドロスが王位に就き 殺害されたパウサニアスを裏で操ったのは彼女であった 例えば、フィリッポスが暗殺された時には、犯人として ス評価されることの多い、「悪女」として名高い われるが、 ンドロスは生涯彼女を愛し、親密な関係を維持したこと マケドニアの最高責任者としてアンティパトロスを国 女性であったというマイナスの評価をされることが多い すなわち、アレクサンドロスも始皇帝もそのマイナ 政はこの謀反が失敗に終わった後も彼女を雍 彼女は絶えず国事に口 母に対 クサ

して寛容であり、

生涯その保護者であり続けたというこ

とが出来よう。

IV

王位に就き、偉業を成し遂げることが出来たともいえる 臣たちの支持が大きな役割を果たし、彼の王位継承を確 最高の支持者であり、 また嫪毐の謀反に関与したとして呂不韋を死に追いやっ 子(フィロタス)の反逆にことよせて殺害し、始皇帝も かかわらず、後にアレクサンドロスはパルメニオンを息 であったとされる呂不韋の根回しが完全であり、その引 実なものとしたこと、後者の場合も相国であり、 位しているが、その若すぎる即位に関しては、 ている。すなわち、アレクサンドロスも始皇帝も彼らの き立てによるものであったことは疑う余地がない。にも ルメニオンやアンティパトロスという父の時代からの重 アレクサンドロスは二十歳、 あるいはその援助があって初めて 始皇帝は十三歳で即 前者はパ 実の父

えた彼が誰に王国を継がせるのか尋ねた友人たちに遺し ずれかを子孫後継者として指名したという記録はなく、 彼は女性に対して(親友のヘファイスティオンに抱いた たちが生んだ子供がいたことが判明しているが、そのい アレクサンドロスには複数の妻(や愛人)と彼女 強い執着を持たなかったようである。臨終を迎

パルメニオンと呂不韋を殺害してい

子孫 れているので、アレクサンドロスも始皇帝もその帝国を めないうちに亡くなり、ついで子孫も一人残らず殺害さ けである。しかも始皇帝も後嗣となる太子を正式には決 が判明しているのは長男の扶蘇と末子胡亥、孫の子嬰だ 録は皆無であり、二十数人いたとされる子孫のうち名前 持ち、彼らとの間にいかなる子孫をもうけたかという記 はより徹底していて、彼がいかなる后(本妻)や姫妾を れ、彼の子孫が受け継ぐことはなかった。始皇帝の場合 涯をかけて建国した帝国はその部将たちによって分断 の死後アレクサンドロスの一族は全て殺害され、 た言葉は「最強のものに」というものであり、 代限りの帝王であった。 (血族)に遺産として残すことのない、 実質的には しかも彼 彼が

七七〇~前二五六年)の衰退後、 融合を図る大帝国を建国した。一方、始皇帝も東周 当時知られていた全世界とも言うべき地域に東西文明の 央アジアを越えて、インドに及ぶ広大な領土を征服 置いた後、 していた諸国、すなわち戦国七雄の他の六国を全て征服 VI 統一したその一帯に中国で初めての帝国を建国して アレクサンドロスはギリシアの諸都市を支配下に 西はエジプト・リビアから東はペ 分裂して抗争を繰り返 ルシア、 中

へと吸収・合併されていった。 壊への道を辿り、やがてより巨大なローマ帝国、漢帝国ロスと始皇帝の建国した帝国は、彼らの死後まもなく崩の業績であったことはいうまでもないが、アレクサンドいる。この全世界・天下の統一という事業が両者の最大いる。この全世界・天下の統一という事業が両者の最大

えられている。従って、 の総数は関中で三百、 業績を誇示する告辞を刻んだことは上述したが、その他 た国々を巡幸する際に、 知られている。それらの都市は軍事的拠点であると同時 ドリアを建設、その後も征服した国、もしくは地方にア ことが可能である。 めて自己顕示欲の強い大造営家・建築家であったという にも滅ぼした国々のものに模した宮殿を咸陽に建て、 光の記念碑でもあった。 レクサンドリアという多くの都市を建設し続けたことが ナイル川の河口に彼自身の名前を冠した都市アレクサン VII 彼と彼の軍隊が全世界にその足跡を刻んだという栄 アレクサンドロスはエジプトに滞在していた時に、 関中外には四百にものぼったと伝 アレクサンドロスも始皇帝も極 各地に石を立て、それに自らの 同様に、始皇帝も征服 し滅ぼし そ

度も瀕死の重傷を負い、彼が死んだという噂は絶えず流 W. アレクサンドロスは、その遠征の途上において幾

皇帝の場合も上述したように李斯らが咸陽に戻るまでそ エジプトのアレクサンドリアに運び埋葬したとされ、 造られ、 る様々な予兆・予告があったことを『史記』が記録して が、始皇帝も上述したようにその晩年に彼の死を予告す 怖を抱くようになったことをプルタルコスが伝えている 常なものを「霊妙な前兆」と考えて、心をかき乱され恐 吉な現象が起こり、彼自身それらの不思議な出来事や異 普通の「病死」であった。この他、前三二三年の春バビ れているが、彼の死もまた五回目の巡幸の途上に であったとするのが定説である。一方、始皇帝は よって衰弱していた体を襲ったマラリアによる「病死 されたにもかかわらず、現実には彼の死は過度の飲酒 の死を隠蔽したために死体が腐臭を放ち、 ったが、側近の一人プトレマイオスがこれを奪 ロンで防腐処理が施され、 いる。しかもアレクサンドロスの死後、その亡骸はバビ ロンに入る頃からアレクサンドロスの周辺には様々な不 遭遇し、いずれの場合も危機一髪であったことが明記さ 記』に記録されているだけでも三回の暗殺や殺害事件に マケドニアの古都アイガイに運ばれる予定であ 豪華な霊柩車が二年もかけて それを誤魔化 おける

すために乾魚を一杯積み込んだというエピソードが

に残されている。

従って、

彼らの死に関してはアレ

13

死」であること、 の埋葬までにかなりの時間を要したという共通点が見出 避けがたい運命として彼らを襲ったこと、そして死後そ クサンドロスも始皇帝もおよそ英雄に相応しくない「病 しかもその死は様々な形で予告され、

に認められる。彼らの死はそれまでに繰り返された戦い く世界の果てまで見極めたいという夢の実現のためであ とである。もう一つの相違点は、 戦い、その天才的ともいえる軍事力・戦略で勝利を収め 事業において、アレクサンドロスは自らが先頭に立って 最も顕著な相違点は、その全世界・天下の統一という大 彼らには決定的な相違点があることもまた事実である。 っているとされる「仙丹」を得ることであったという点 ったのに対し、始皇帝の巡幸は仙人に憧憬し、彼らが持 マがアレクサンドロスには皆無であり、 獲得されて始めて征服した国々に足を踏み入れているこ 蒙恬ら)を駆使することによって勝利者となり、安全が に参加することはなく、 ているのに対して、 以上、八項目を立てて両者の類似点をとりあげてきが、 始皇帝の場合には決して自らが戦闘 優秀な将軍たち 不死の探求というテー 彼の遠征は恐ら (王翦、 王賁、

> 対照的に、 あり、 れてもなお「まだ見ぬ国」への遠征を語っていたのとは していることは上述したが、アレクサンドロスが病に倒 の言葉に惑わされて大魚の姿をしているという「海神」 の最中における怪我や事故、 に相応しい劇的なものではなく、 埋葬するまでにかなりの日時を要した点でも類 始皇帝の場合はその最晩年においても方士ら もしくは暗殺といった英雄 あくまでも「病死」で

いる。後者にとっては、名声よりも自らの不老不死が何を追い求め、これを射殺するといった愚行を繰り返して げた全世界・天下の統一という偉業、 誕生から家族関係、若すぎる即位、ほぼ十年間で成し遂 与え続けるのであるが、それにしても両者の類似はその 兆に集中していることである。 は記録がなく、むしろ予兆・予言はその晩年における凶 ば見出される奇跡、神々の援護や幸運の瑞兆は始皇帝に もう一つの相違点は、アレクサンドロスの場合にしばし ずにはいられない希望であり、 よりも望ましく、いかなる犠牲を払ってもなお追い求め プラスの、後者はマイナスの存在としての印象を人々に ンドロスと『史記』「秦始皇本紀」の始皇帝は、 従って、 妄執であったといえよう。 その偉業を誇り、 史実の アレ 前者は クサ

宣伝するための大建築・土木工事、死を予告する凶兆と

回

た彼は、 子をこの英雄の相似形として成長することを期待したの やその業績を聞き及び、 い業績を聞くことによって、両者に幾つかの共通点を発 バン)の人々からアレクサンドロスの生涯やその華々し 持ち、各国の物産を広く取り扱っていた商売人)であっ ぞらえることになる幾つかの可能性があったに違いない 中国、とりわけその最西端に位置して秦には伝えられて 頃には既にアレクサンドロスの存在やその偉業の数々は 考えている。恐らく、 ではないか。当時の中国において大賈(各都市に店舗を のである。例えば、始皇帝の実の父とされる呂不韋が息 いたと思われ、その結果始皇帝をこの不世出の英雄にな サンドロスの模倣者であったことに由来すると私自身は このような類似は、 もしくは、始皇帝その人がアレクサンドロスの生涯 始皇帝をその後継者にしようとしたのかも知 シルクロードを通ってやってくる隊商 あるいは彼のブレーンの誰かが両者を類似さ 戦国時代の末、始皇帝が生まれた 秦の始皇帝がマケドニアのアレ 彼の末裔であろうと意図したか (キャラ れな ク

> らも明らかである。 (25) 込み、新しいアレクサンドロス像を描出していることか ンドロスばかりでなく、 アレクサンドロス・ロマンスの主人公たちが、アレクサ 始皇帝はアレクサンドロスの模倣者であり、 ではなかったか?しかし、彼の努力にもかかわらず、 ちが目にするような『史記』の始皇帝像を創りあげたの 帝のブレーンの意図を消去することに専念し、今日私た ではなかったか? 彼は呂不韋、始皇帝、もしくは始皇 らも、記録を改変、光と影のような二人の存在にしたの 作者の司馬遷は、両者を比較し、その類似に驚愕しなが あるが、やがて百年を経て漢帝国に誕生した『史記』の 生した双子のように描いたのではないかと思われるので 始皇帝をアレクサンドロスに酷似した存在、 たかも知れない。いずれにしても、『秦記』 せることを思いつき、『秦記』に書き残した結果であっ 一人であり続けたことは、さらに彼の死後に創作された 始皇帝の業績をその内容に取り その末裔 の作者は 西と東に誕

註

あったが、次第に「皇帝」すなわち「諸王の王」(ba-リシア語で表したもので、元は「王」を意味するもので(1) バシレウスという語は、アケメネス朝の王の称号をギ

sileus basileon)という用語へと転用された。本稿においいる。

- (2) 松村一男①「アレクサンドロス」『世界の神話 英雄 事典』河出書房新社、二〇一九年、五四~五六頁、奥西 峻介「セカンダル」同二〇〇~二〇一頁の他、森谷公俊 ①『アレクサンドロス大王』講談社、二〇〇一年、ロビ ン・レイン・フォックス著、森夏樹訳『アレクサンドロ ス大王』上・下巻、青土社、二〇〇一年など参照。Cf. W. W. Tarn, Alexander the Great, Beacon Press, Boston, 1956. N. G. L. Hammond, Alexander the Great: King, Commander and Statesman, Noyes Press, New Jersey.
- トンプレス、二〇〇〇年、二〇六~二一三頁参照。サンダーの野望―ギリシャからアジアへの旅―』ニュー(3) マイケル・ウッド著、吉野美耶子訳『大遠征 アレキ
- スの王国は実質二十年の短命に終り、リュシマコスとカスは東地中海からペルシア東部に及ぶ広大な領域を、プルコシマコスはトラキアを、セレウコスは東方諸属州を、トレマイオスはエジプトを、セレウコスは東方諸属州を、パトロスの長男)はマケドニアを支配下に置き、それぞパトロスの長男)はマケドニアを支配下に置き、それぞパトロスの長男)はマケドニアを支配下に置き、それぞれ五の王国は実質二十年の短命に終り、リュシマコスとカースの王国は実質二十年の短命に終り、リュシマコスとカースの王国は実質二十年の短命に終り、リュシマコスとカースの王国は実質により、アレクサンドロスの帝国から五つの王国と六人の王が4)。アレクサンドロスの帝国から近の天は、カースの王国は実質により、カースの王国は実質により、カースの王国は実質により、カースの王国と大人の王がより、アレクサンドロスの帝国から近り、リュシマコスとカースを表した。

・サンドロスの王国はいずれも複数の息子たちの後継者ッサンドロスの王国であったが、前者はローマのオクタヴセレウコスの王国であったが、前者はローマのオクタヴセレウコスの王国であったが、前者はローマのオクタヴセレウコスの王国であったが、前者はローマのオクタヴセレウコスの王国であったが、前者はローマのオクタヴセレウコスの王国はいずれも複数の息子たちの後継者ッサンドロスの王国はいずれも複数の息子たちの後継者ッサンドロスの王国はいずれも複数の息子たちの後継者

ウス・ルフス、ユスティヌス、アリアノスらの著述であ など六人の著述が知られているが、彼らの原典は失われ トレマイオス朝エジプトで活躍した作家クレイタルコス トス、大王の学友ネアルコスの他、やや時代が下ってプ すなわち側近の一人プトレマイオス、歴史家カリステネ なからぬ部分とアジアの大半を征服し、古の英雄や半神 を凌駕した。というのも、 太古の時代から記憶によって伝えられているすべての王 あった。例えば、前者は「この王の……功業の大きさは 知的環境下にあって彼を美化する傾向は増幅する一方で 百年近くの歳月が経過していて、ローマ帝国の政治的・ ロスでも大王の死から三百年、アリアノスに至っては五 る。なお、これらの五篇の著者の中で一番古いディオド 五篇、すなわちディオドロス、プルタルコス、クルティ は(これらの原典に依拠しつつ)ローマ時代に書かれた て現在は断片を残すのみである。 今日、現存する大王伝 ス、技術者・建築家アリストブロス、哲学者オネシクリ 大王伝に関しては、アレクサンドロスの同時代の人々 彼は十二年でヨーロッパの少

賛辞を呈している。森谷②、二六~三六頁参照。 ・現れるものではないと私には思われる」という過激なかった。実際、かくも比類なき人は、神なくしてこの世かなかった場所はなく、その名を聞かなかった者もいないかなる人物であれ、およそアレクサンドロスの名が届出る「思うに当時、人類のいかなる種族、いかなる都市、たちに匹敵する赫々たる名声を手に入れた」と述べ、後たちに匹敵する赫々たる名声を手に入れた」と述べ、後

- (6) 村川堅太郎編 『ブルタルコス英雄伝』中巻、筑摩書房、 (6) 村川堅太郎編 『ブルタルコス英雄伝』中巻、筑摩書房、 (6) 村川堅太郎編 『ブルタルコス英雄伝』中巻、筑摩書房、 (6) 村川堅太郎編 『ブルタルコス英雄伝』中巻、筑摩書房、
- (7) 同上、二八頁。この種の奇跡は『旧約聖書』「出エジプト記」ではモーゼがエジプトから逃れ出て紅海を渡る際に、海が二つに分かれて道が出現し、イスラエルの内々だけが渡ることが出来、追ってきたエジプト人は海の中に投げ込まれた、また朝鮮神話では新天地を求めて旅だった高句麗の始祖朱蒙が、行く手を大河に遮られた旅だった高句麗の始祖朱蒙が、行く手を大河に遮られたなど、本面を叩くと魚鼈が並び橋となって彼の一行を渡してくれたが、追っ手はすべて溺死したと語られるなど、英雄叙事詩にしばしば見出される「大河(海)渡渉」のテーマの一つである。
- が神アンモン=ゼウスの子であるという確証を得たとさ) 同上、四一~四二頁。ここでアレクサンドロスは自分

が彼を目的地へと先導した事例が見出される。の現象が起こり、鴉による道案内というエピソードは、の現象が起こり、鴉による道案内というエピソードは、に関しては、上述したモーゼにも出エジプト以後に類似れる。なお砂漠における水や食料不足が解消される奇跡れる。なお砂漠における水や食料不足が解消される奇跡

東方のモンゴルや中央アジア、マレー半島にもその痕跡 Groningen, 2012. なお、最後にあげた参考文献では、ア Alexander Romance in Persia and the East, Barkhuis ard Stoneman, Kyle Erickson, and Ian Netton (ed.), The nes, Cambridge University Press, Cambridge, 1889. Rich Great: Being the Syriac Version of the Pseudo-Callisthe Cf. E. A. Wallis Budge, The History of Alexander the 光文社、一九九八年、二五、一八二~一八五頁など参照 諸系統の図版の他、田名部昭『アレクサンドロス大王』 頁の付録「偽カッリステネスのアレクサンドロス物語 屋大学出版会、二〇〇九年、一九頁以下、及び巻末二三 五~五六頁、山中由里子『アレクサンドロス変相』名古 シリア語版、アラビア語版、ペルシア語版などを経て) ンドリアを源泉とし、アルメニア語版、ギリシア語版、 語り伝えられたことが論及されているが、山中由里子 の地域でそれぞれの変貌・変容を遂げた物語が生まれ、 ペルシア、アラビア、イスラエル等々に及び、それぞれ レクサンドロス・ロマンスの分布地域はトルコ、インド (同書、二六三頁)は「(この物語はエジプトのアレクサ アレクサンドロス・ロマンスに関しては、松村①、五

ドロスの模倣者、もしくはその末裔の一人だったのではて、秦の始皇帝の生涯をとりあげ、彼もまたアレクサン本稿においては、このような氏の指摘に対する反論とし本の中国版は今日まで発見されていない」と指摘する。描いた偽カッリステネスのアレクサンドロス・ロマンス、描いた偽カッリステネスのアレクサンドロス・ロマンス、描いた偽カッリステネスのアレクサンドロス・ロマンス、が認められる。にもかかわらず、中国には彼の全生涯をが認められる。にもかかわらず、中国には彼の全生涯を

ないかという仮説を提示するものである。

- 〜二五頁、大形徹『不老不死―仙人の誕生と神仙術』講(12) 桐本東太「不死の探求―始皇帝巡狩の一側面」『中国古代の民俗古代史研究』第六、一九八九年(のち『中国古代の民俗古代史研究』第六、一九八九年(のち『中国古代の民俗と文化』刀水書房、二○○四年書所収)、中野美代子『龍と文化』刀水書房、二四二頁参照。

- 談社、一九九二年(同タイトルで志学社より、二〇二一
- 13) 実際、『史記』「淮南列伝」は将軍伍被の言葉としていた」と評している。
- (4) 鶴間和幸編著②『悪の歴史』東アジア編、上、清水書は、二〇一七年、八四頁。例えば、「焚書」はその法案にはって地上における全ての書物が焼き払われたかのように曲解され、また「坑儒」の実態はむしろ妖言を用いて人々を惑わす方術の輩(方士や道士)を排外することを目的としていたにもかかわらず、「諸生賢儒」が埋められたかの如く粉飾された。「万里の長城」の建造についても、たかの如く粉飾された。「万里の長城」の建造についても、たかの如く粉飾された。「万里の長城」の建造についても、たかの如く粉飾された。「万里の長城」を排外することを「白声といた。」東アジア編、上、清水書は、二〇十七年、八四頁。例えば、「焚書」はその法案には重がかかり、後には盃美女の悲劇を語る伝説すら生むに至るのである。
- 自国を「僻遠の国」と称している。森谷②、六一頁以下、ことが出来ず、また『史記』「范睢列伝」では昭王自らがオリンピック競技会に「外国人」であるとして参加する) 実際、マケドニアは長い間、ギリシア人の祭典である

- 松丸、三三四頁など参照。
- 田名部、一二四~一二五、一七六頁以下、森谷公俊③ オリュンピアスは前者が娶った若い妻が男の子を生んだまれる状態にあったので、後にこの幼児を絞殺、またアレクサンドロスの後継者争いの際にはその異母兄アリダイオス(フィリッポス三世)を暗殺するなど、その行為には非難されるべき点が多々あったことも事実である。には非難されるべき点が多々あったことも事実である。には非難されるべき点が多々あったことも事実である。には非難されるべき点が多々あったことも事実である。には非難されるべき点が多々あった若い妻が男の子を生んだけ、実際、フィリッポスとの夫婦関係は冷え切っていて、「17) 実際、フィリッポスとの夫婦関係は冷え切っていて、「17) 実際、フィリッポスとの夫婦関係は冷え切っていて、「17)
- に立かである。 権を脅かすものであったかを推定させるであり、その王権を脅かすものであったかを推定させるうかがわせるものであると同時に、マケドニアにおける(18) 但し、この忘恩ともいえる行為は両者の冷酷な性格を(18)

書房、一九九八年など参照

『王妃オリュンピアス―アレクサンドロス大王の母』筑摩

19) 彼らの帝国はより大きな、より永続する大帝国の先駆

バシレウスの末裔

- 三六九~三七二頁。 三六九~三七二頁。 『アレクサンドロス大王』集英社、二〇〇四年、あったといえよう。 パーサ・ボース著、鈴木主税・東郷者として、束の間の光芒を放って消滅する流星のようで
- 一九九一年、一三○頁など参照。 一九九一年、一三○頁など参照。 一九九一年、一三○頁など参照。 松丸、三四五~三四六頁など参照。
- (22) 松村②、五八~五九頁によれば、英雄の生涯パターンは一定の要素が欠落していて、その誕生、成長、武勲、死などに不思議な類似が認められるが、最後にあげた死に関しては「英雄のそれは寿命を全うした自然死でた死に関しては「英雄のそれは寿命を全うした自然死でかかわらず、アレクサンドロスと始皇帝の場合には明らかかわらず、アレクサンドロスと始皇帝の場合には明らかかいこの要素が欠落している。
- (2) 実際、アレクサンドロスはその最後の日々を過ごした

五〜三四六頁。

五〜三四六頁。

五〜三四六頁。

五〜三四六頁。

(24) 海神について、『史記』は徐福たちが「仙丹」を入手できないのは大鮫魚が現れるためであるとして、これを夢を見たところから、海に浮かぶものたちに巨魚(海た夢を見たところから、海に浮かぶものたちに巨魚(海神は目で見ることはできず、大魚・蛟竜の姿をしている。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。る。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。る。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。る。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。る。皮肉なことに、彼はこの直後に「病死」している。方力ンドロス・ロマンスの主人公たち――」(東北大学・クサンドロス・ロマンスの主人公たち――」(東北大学・山田仁史追悼論文集『神話研究の最先端』笠間書房、二

謝辞

○二二年所収)において論究する。

心からのお礼を申し上げたい。授の奥西峻介先生に多大のご教示・ご学恩を頂いた。ここに授の奥西峻介先生に多大のご教示・ご学恩を頂いた。ここにアレクサンドロスの参考文献に関しては、大阪大学名誉教